国木田独歩の佐伯での生活（七）

山内武麒
（賛助会員・佐伯市城下東町）

四日（十一月）の記には「昨日の生活を記し置くべし」と前書して、三日の記を書いてある。

先ず女島への散歩記である。

昨日は天長節で学校は休みであった。午前収二と共に女島の野を散歩した。日は暖かで小春日和であった。しかし秋は矢張り秋である。はぜの紅葉は己に散って枝に残っている葉も風が吹く度にひらめき落ちている。その様を見て秋は矢張り秋であると感じた。海近い河口に行って石にこしかけて休んだ。そして次にそこで見たことを記してある。

潮をちて洲あらはれ、烏の群しきりに飛びめぐる。水門を下す童子を見き。小舟をなだ山に渡さんとて潮をまつ小供を見き。水門の傍に背ひくきはぜ、堤の上にたちて浜風に紅葉をかゞやかす様の美しき。渡守りを見き。此渡守りの小屋に入りて物語らば面白からまし。彼も亦、わが「物語」に入る可き一人ならずや。ひよ鳥のはぜの枝に飛びさわぐも秋なり。魚鷹（みさご）の其純白なる裏毛を日にかゞやかし、其のするどき翼を浜風に弄して飛ぶを見るも亦た、勇ましさ秋の気をたすくるなる可し。之れも亦た吾が「物語り」の種か。

と、ある。観察し感じたことは自分の詩作の材になるのではなかろうかと、よく見ている。次に女島の様子を記してある。

女島には山がある。多分以前は小島であったのだろう。愛らしい小山である。樹木が生い茂っている。先日、日置泉氏が云っていた。この山に鳩が集まる。それで遊猟

者にとってチャームである。と、これを聞いていたのでこの小山は益々自分には愛らしい。その麓に小さい村がある。家の数は十数軒だろうか、河口の浜風が吹くところに女島の田野が広けている。自分にとって愛らしい村である。これも「物語」の種を供してくれるであろう。この村にどんな人物が居り、どんな物語りを見出すであろうか。この村の歴史もかえって面白いかも知れない。いつか探ってみよう。と、女島の山、村の様子を述べてある。

この女島の山の森には「冲嶼が森」と名づけられている。佐藤蔵太郎著の『佐伯志』には「冲嶼ケ森」と題して次のような文がある。

女島村の北角、中江と対する処に小丘の崎つものあり。土人呼びて冲嶼ケ森といふ。森林欝律として、頂上に鎮座せる一神社あり。之を冲嶼明神と称ふ。其の丘麓に深渕にして深さ測るべからず、伝へ云ふ。此渕には昔巨大の亀棲みて、偶ま水面に浮ぶときは、首の太さ殆んど馬に等しかりしが、一歳土佐より亀捕来伯し、夜中笛を鳴らして件の亀を浮ばせ遂に生捕りて帰れりと云ふ。

次に魚市場の光景を記述してある。

魚せり場。之れ亦た「物語」の種ぞかし。其処に集まる、漁夫、老翁、小女、若者、皆なそれぞれの生命を此世に保つが故に、皆なそれぞれの深き物語りを保つなる可し。昨日、茲にてたけりのゝしる男を見ぬ。彼は何者ぞ、之れ亦た何かの物語りならまし。

と、ある。魚せり場即ち魚市場は昔は芳島にあった。住吉神社の向う側内町川の岸辺にあった。葛港に魚市場が出来るまでこゝが唯一つの魚市場であった。上浦の漁師も中浦の漁師も、早朝市場のすぐ前の川岸まで魚を積んだ小舟を乗りつけ、魚を市場に運び込んでせりにかけていた。威勢のよい掛声で呼ぶせり男の云う値につれて、仲買人は思い思いの値をつけて落し買い込んでいく。この光景は勇ましく景気よく賑やかなものであった。

以前、町から女島へ行くには、今のような塩屋橋を渡って女島橋へ通じる一本筋の女島道は無く、太平橋か諸木橋を渡って芳島へ行き、この魚市場の横を通って川岸に沿って作られた細い道を通って女島橋へ出て女島へ渡っていた。この女島橋が無い前は渡し舟で渡っていた。独歩が行った頃はまだ渡し舟であった。

独歩兄弟は女島へ行く道の行き帰りにこの魚市場の光景を見たのであろう。

この日の午後は湖処子作のウォーズウォース伝を読んでしまった。この本は二三日前に徳富氏から贈られた平民叢書八冊、十二文豪四冊の中の一冊である。

そしてまた昨日の午後四時から警露館の宴会に出席した。毛利氏の邸内で開かれたのである。立食の饗応があった。土地の上流の人達の集会で、五六十名であった。旧藩主毛利公の主催で天長節の祝賀会であったのであろう。集まった人々は町内で錚々たる有志の面面で、独歩は鶴谷学館の教頭として招待されたのであろう。集まった人の中で一番年若であったであろう。尚警露館とは毛利子爵の邸宅で、今の料亭池彦の家である。今の池彦は当時より改造されているが、昔のまゝの室も残っている。

夜は観察するために独りで散歩している。北町のさびしい士族屋敷のつゞく町を横ぎり古河町（古市町の誤り）の暗い裏町をすぎ、船頭町に行き、そこで長田君（学館生徒）と遇い一しょに帰って途中で別れて帰宅した。

次にこの散歩で観察し感じたことを次のように記してある。

此のさびしき市街！　ウォーズウォースが村落を見たる同情を以て観せしめよ。意味深き物語りなからめや。市街にすむ人々も亦た人間なり。天地間に於ける人間ならん。其の生存、生活、は意味ある者に相違なし。或はラブ。或は高き感情、皆な彼等を動かす者ならぬはなし。うす暗き燈障子にうつりたる家、戸しまりて人げ空しき家、軒破れてかたむける家、笑ふ声のもるゝ家、かのかじや。かのをけや。彼の小供等。彼の理髪所。彼の井戸。豈に意味深き物語りなしとせんや。記憶せよ。皆な天地間に存し、此自然の中に起る事実なり。高き処より見おろせ。豈に深趣ある物語りなしとせんや。

と、ある。凡てのものを同情の眼で深く観察すると、凡てのものに意味深い物語を秘めていると信じている。

そして、自分の天職とするところは、人々が一層深い注意と感情をもってこの自然とこの人生を見ようとするために尽すことにある。と、詩人としての本分を明らかにしている。

以上は三日のことの記で、次に四日のことを記してある。

見よ、今日もうらしろ峠の美しき山の平野より、白き煙たち登るなり。此白き煙、又た「物語」の料なり。と、思い、この火をたく人を想像し、その一生を想像し、その運命を想像すると同情の涙が流れてくる。

生死のつきざる海より此白煙の立ち登るを見よ。人生と此白煙！　何のハーモニイなしと思ふは非なり。と、木立の野から立ち登る白煙を眺めて、同情の心をもって人生を考え、人生と自然との調和を感じて詩想が浮んでいる。

坂本家で独歩兄弟が起居した二階の室からの眺望はすばらしかった。灘山、木立山、元越山から堅田の龍王山まで一望のうちにあった。家の前はひらけた田畑であったからである。しかし今はこの田畑はすっかりつぶされて家が建ち並んで、この眺望は全く出来ない。午後は登校して授業をした。そして四時に帰宅して散歩に出で牛つぼ村（臼坪村）の前を通った。とり入れの時季で農夫は悉く田野に出ていた。臼坪からの道が堀の処で他の道と会するあたりに若者たちが群集していた。女の群もあった。のををつくる男がいる。稲を打つ者もある。大さわぎである。と臼坪の野の刈入れ時のにぎわいを叙して、紅葉は夕陽をうけて美なること言ふ計りなし。牛つぼ村の後に當る山に登り夕陽の遠景を眺む。静に祈る。と、記してある。

六日の記には、

見よ。またも彼の山に煙たちのぼるなり。朝霧をへだてゝ彼の山の朧ろにみゆる其うちに白銀色の煙たちのぼるなり。彼の山は昨日遊びし山なり。

と、室の窓から眺めた元越山の風情である。そして「昨日の事を記さん」と書き出して元越山への登山記を記してある。

昨日登った山は普通十二段と呼んでいることを今日飯沼君から聞いた。自分は自分の室の窓から毎日眺めてそのあまりに美しいのに堪え切れなくなって、昨日とうとうその山に登った。八時すぎ弟と共に家を出た。この上もない好天気であった。船頭町の川岸から川船に乗って木立という村の川岸に着いた。

そして次に舟の中のことを記してある。

此間水上一里を少しく越ゆ。同船者は余と弟とを除きて七人、中、女三人。彼等の談話は吾が耳に新なり

き。凡て此人々の談話は耳に新なり。船頭は老ひたれど逞ましげなる男なり。船ゆるやかに河流を渡る心地の面白さ。吾にはじめての事也。両岸の紅葉、岸頭の茅屋、之れをかこむまがき、其傍に立つ田舎娘、青びかる淵、きびわるげのうづ、皆吾が目にめづらしからぬはなし。此の河船もたしかに吾物語の料なりと思ふ。之れによりて往復する田舎の民、其婦其嫗、其小女、いちいちたゞさば悉く相応の美しき物語をもたぬはなかるまじと思はる。同情に堪へぬは此等の生涯なり。と、ある。木立おろしの風情をよく描写してある。

この木立おろしは木立の船頭たちが川船を漕いで船頭川岸と木立の角道との間を往復して、客や荷物を運んでいた。この船が池船橋畔に幾艘も集って互に客を引き合い、客が幾人か乗ると川を下って木立に向っていた。この記にあるように船中での乗合った人々の話に面白く、又両岸の景色は次々と変ってとても美しかった。今は立派な道路が通じて車が往来し、この木立おろしの姿は全く消えてしまった。

独歩兄弟は木立の川岸に降りて浦代峠に向っている。裏代峠（浦代峠の誤り）に登り、そこにある茶屋のおかみに十二段の絶頂に登る道を尋ねた。おかみの云うには、これからは道らしい道はない。自分も以前登りかゝったがあまり難道なので引き返した。と、しかし元来剛情者のわれら兄弟はその道を進んだ。果しておかみの言った通りその難路は云うに云われない程であった。いばらに行手をさえぎられ行きも戻りも出来ない目に幾度もあった。その時小さなひづめの跡を見出した。これは猪のでなければ鹿の足跡である。恐ろしくなった。

とうとう一本の道に出た。これに力を得て山頂目がけて登った。松の老株の下に石地蔵があり、その傍で一人の老いた樵夫が休んでいた。この人が親切に道を教えてくれた。ウォーズウォースのマイケルを思い出し、この老翁のことを考えた。

そして山頂に登りつき、その眺望を次のように記してある。

山嶺に達したる時は四囲の光景余りに美に、余りに大に、余りに全きが為め、感激して涙下らんとしぬ。只だ名状し難き鼓動の心底に激するを見る也。

太平洋は東にひらき。北に四国地、手にとるが如く近く現はれ、西及び南は只だ見る、山の背に山起り、

山の頂に山立ち波の如く潮く如く其の壮観無類なり。最後の煙山遂に天外の雲に入るが如きに至りては、人をして一種のメランコリーの情あらしむ。又た遥かに周防の嶋嶼、多分祝嶋らしき者を眺め得たり。雲の美や、空の美や、山の美や、海の美や、アヽ此地球上の美は已に全き也。

と　ある。頂上の絶景に強く心を打たれ、その壮観を筆巧みに描写してある。

そしてこの山の絶頂にある一等三角点の標柱の立つところに登り坐して、絶景に魅せられながら湧き出た感想を記してある。

大なる自然に対する毎に自然は吾に近く在り。吾は自然に打たるゝ也。自然の大を見る毎に人生の不可思議、霊妙を感ず。人類の歴史は幻の如く吾が前に、其最初第一の原始人より最後第一黄金時代の子との間の人類の歴史の縮図精神を示すなり。生死の窮りなき海は眼下に横はるを見よ。

と、得た感銘を記述してある。

独歩の遺稿（国木田独歩全集巻九所載）の中に「元越山に登る記」と題して、この登山記を詳細に記述した小品がある。しかしこれは独歩の作でなく、弟収二が書いたものらしい。これを読むと、行きに乗った木立おろしの風情に興味を覚え、木立から浦代峠に登り、道もろくにない山を無理をしながらよじ登り、いばらに行く手をはゞまれて二進も三進も出来ないめにあいながら、二人は握飯を頬張って元気をつけて登った。たまたま猪か鹿のひづめ跡を発見しておそろしくなり、独歩はナイフを手にしながら登ったと云う。

漸く頂上に登りつき、その壮大壮麗な展望に魂を奪われ、感激のあまり涙を流している。

独歩は登りたいとあこがれていた山にようやく登って、どんなに嬉しく満足したことであろう。　（つづく）